

# 海外農業ニュース

No. 7

昭和45年6月20日発行  
毎月20日発行



## もくじ

インドネシア国ならびにタイ国現地農業  
事情調査報告(其の一).....1

ージャワ島における日本商社の活動ー

## トピックス

ビマス・ゴトン・ロヨン中止の閣議決定.....35

ビマス・ゴトン・ロヨンの廃止と食糧計画.....36

畜産関係の外資進出.....インドネシア.....39

飼料増産総合計画.....フィリピン.....39

林業の状況.....ビルマ.....40

## 資料

ビマスとその発展の歴史についての情報.....43

ビマスーその基礎、当面問題および将来.....53

ビマスおよびその統制.....61

事務局だより.....71

# インドネシア国ならびにタイ国現地 農業事情調査報告（其の一）

## ——ジャワ島における日本商社の活動——

事務局長 石黒光三  
財団専門家 中田正一

### まえがき

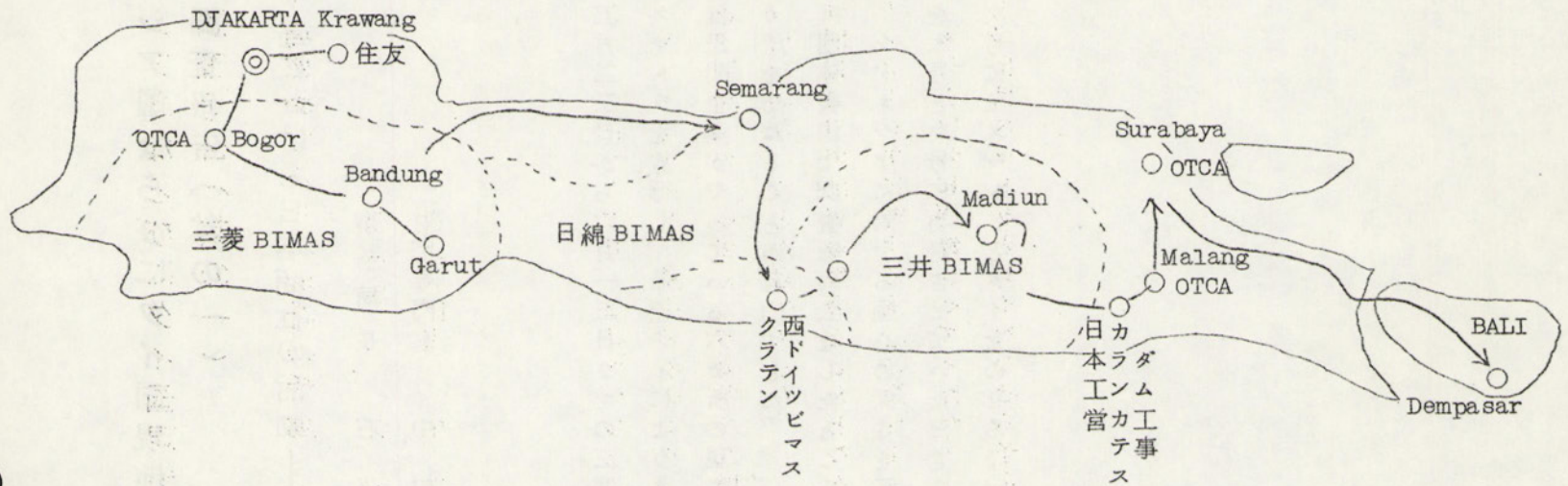
私たちは、去る五月二三日から六月一三日までの三週間、インドネシアのジャバ・スマトラを旅行し、帰途タイにやりました。インドネシアにおいては民間企業がやっている六カ所の現場と、あわせて政府ベースの二カ所を訪ねることが目的でした。

去る六月二九日経団連会館で調査報告会をしたところ、百名余の方々が来聴され、インドネシアに対する関心の深さを示されました。その時の報告内容を本号と次号に再録させていただきます。本号はジャバを主とし、次号にはスマトラとタイをのせる予定です。



# ジャワ島調査行程図

(全行程自動車による)



## ビマス・ゴトン・ロヨン計画の中止

五月二三日夕刻ジャカルタについて、まずおどろいたことは、「五月二〇日の閣議でビマス・ゴトン・ロヨンの打ち切りがきまつた」ということを聞かされたことです。

私たちは財団として、各商社の現場活動にたいして、何等かのお手伝いをしたい、その具体的方法を見つけよう、というのがこのたびの旅の目的でした。それがイネの乾期作の終る九月で各商社の活動中止というわけです。

この乾期（四月～九月）にビマス・ゴトン・ロヨンの計画に参加しているのは、日本では、三菱・日綿・三井（技術チームは三井高庄編成）の三グループです。一九六八年の雨期作（一〇月～三月）からスイスの製薬会社シバ（三〇万ha）が参加し、その翌年の乾期からドイツの製薬会社のヘキストAHTおよび外国とインドネシアの混成チーム。「ターバー」が参加しました。三菱商事が一九六九年から七〇年にかけての雨期、すなわち昨年一〇月から参加、日綿と三井グループは今年の四月から参加したのです。日本の商社は参加したばかりで打ち切られるということになりました。

二〇日の閣議の結果は二一日の新聞に出たのですが、その発表の最後のところに農業大臣は「一九七〇年／七一年にかけて、つまり今年は、一、一四〇万トンを穫るんだ、それから五カ年計画の最後の年、一九七三年／七四年には一、五四〇万トンを達成する」としめくくっています。インドネシア開発の五カ年計画、それは米を

一、〇〇〇万トンから一、五〇〇万トンに、五カ年のうちに五〇%を増やそうというのが、この計画のねらいです。この目標自体に変りはないが、ただし、政府はたいへんな赤字を出した。六九年の赤字が



一〇〇億ルピア、ほぼ日本の一〇〇億円とみてよい。ドルにして三、〇〇〇万ドルの赤字です。「国がこれだけの赤字を出しながら、外国の商社にだけもうけられてそれでよいのか、再検討すべきである。」というのです。

私たちが、二三日の夕方着いた時には、ジャカルタの各社支店はこの問題でごった返しておったというのが実情であります。

そこでビマス(BIMAS)計画のごく要点だけを申しますと、ビマスという言葉は~~ビマス~~<sup>ビマス</sup>・ガイダンスという意味で、農民のグループをつくり、それに対し集団指導をしようというのです。ですから農民にたいする普及教育事業だといってよろしい。国が農民のグループに種子、肥料、農薬、農機具などを供給しながら集団指導を行い、農民が収穫物の $\frac{1}{6}$ を国に納めるといふ方式をビマス・ナショナルと呼んでいます。

ところが、外国の商社が参加する方式が一昨年から始まり、それをビマス・ゴトン・ロヨンとよんでいます。ゴトン・ロヨンというのは相互扶助という意味です。回教の相互扶助組織に外国の商社が加わって、肥料、農薬、農機具などを農民に提供し、外国商社は政府からその分の金をもらい、農民は政府にたいして収穫物の六分の一を納めるといふしくみです。このビマス・ゴトン・ロヨンが昨年、一〇〇億円の赤字を出したというのは、農民が収穫物の $\frac{1}{6}$ を納めるはずが、その半分しか納まっていなからです。そこに問題があります。

イナ作の改良には五つの目標をかかげています。

- (1) 改良新品種の採用
- (2) 肥料の利用
- (3) 病虫害の防除
- (4) 改良栽培法の確立
- (5) かんがい組織の整備、の五つです。いってみれば集約

的な、近代的なイナ作とでもいうべきものです。インドネシアに  
つては肥料、農薬を使用しはじめたのが、だいたい一〇年前と考  
えてよいのではないかと思うので、たいへん新しい歴史であります。  
農民たちは肥料、農薬、農機具などの使い方には馴れていません。  
ビマス・ゴトン・ロヨンに参加している商社は農業の技術者チー  
ムを送って、肥料、農薬、農機具を提供すると同時に、それらの使  
方を実地に指導しているわけです。

いずれにしても、日本の商社が参加したばかりなのに、この乾  
かぎり、九月末で中止ということはたいへんなショックです。そ  
で私たちは次々と現場を訪ねたので、現場の話から進めてみたい  
と思います。



ビマス・ゴトン・ロヨン実績

	(1968/69 雨期)	(1969 乾期)	(1969/70 雨期)	(1970 乾期)
CIBA (スイス製薬会社)	300,000ha	150,000ha	400,000ha	125,000ha
HOECHST (ドイツ製薬会社)		100,000	250,000	75,000
COOPA (インドネシア混成)		250,000	150,000	—
AHT (ドイツ製薬会社)		50,000	60,000	40,000
三菱商事			225,000	75,000
日綿実業 (日本)				50,000
三井グループ (日本)				45,000
<hr/>				
BIMAS Gotong Rojong 計	300,000ha	500,000ha	1,085,000ha	410,000ha
BIMAS National 計	670,000	150,000	315,000	
<hr/>				
BIMAS 計	970,000	650,000	1,400,000	

### 新品種の普及をはばむもの

ジャカルタに着いた翌日は日曜日でしたが、住友のクラワンの現場を訪ねました。ジャカルタから東へ約二時間ぐらいのところの稲作地帯です。

私たちの出発の一週間ぐらい前に、インドネシア政府の農業総局長のサデキン氏が日本へお見えになり、財団で会合をもちましたがそのときサデキン氏は「インドネシアでは新品種は約三〇万ヘクタール作っております」と言っておられました。

そこで私たちは、まず、ジャカルタからクラワンまで車で二時間の間、新品種IR15がどのくらい作られているだろうかと期待しながら、車の窓から眺めつけました。ところが、とうとう二時間の間、スイスCIBAの展示圃以外にはIR15はみつけることが出来なかった。IR15は短桿でモミがそろっているので、一見してすぐわかるのです。

サデキン氏の話とたいへんちがうので、クラワンにつくなり、住友の技術者に聞いてみました。その答は、「昨年の乾期作にタマバエが異状発生して、新品種が全滅したのです。それで農民たちは新品種にこりごりして、今年はぜんぜん作らなかったのです」ということです。

*gundjur (ネアモ)*  
*gullmidje*  
**タマバエ (GOLDFLY) イネハモグリ、ハエ**

によくできていても穂が出なくなりです。一説には、スイスのシバ社が月に一回ヘリコプターで無差別爆撃（薬剤散布）するので、害虫の天敵まで殺してしまい、タマバエの異状発生をおこしたのだ、という人もいます。タマバエはあちらではガンジュールとよんでいましたが、在来品種は被害が少ないのに新品種は全滅になったそう



です。西ジャワから中ジャワにかけて、新品種がまったく振わない原因がこんなところにあるのを知っておどろきました。

### 住友独自のビマス

住友のやり方は、ゴトン・ロヨンではなく、どちらかというところ、ビマス。ナショナルに近いもので、国がやるようなことを住友みずからがやっているわけです。住友はカビン社と合併ですが、住友自からクレジットを出して、肥料、農薬、農機具などを農民のグループにわたします。対象面積は約一、三〇〇ヘクタールぐらい、農家にして四、〇〇〇戸ぐらいです。そして農家から収穫物の六分の一を住友へ直接納めさせるという方法です。

ですから、ゴトン・ロヨンのばあいでは政府が農民から収穫物の六分の一を納めさせているのを、住友みずからが農民から六分の一を納めさせている。ところが、政府は五〇％しか納まらないのでたいへんな赤字をだしたが、住友自身も政府と同じ立場だから、たいへんむずかしい仕事をやっているわけです。先だって、技術顧問の柳田さんがお帰りになったとき「ビマス・ゴトン・ロヨンはなかなかうまくいかない。政府の赤字をどれだけ減らすかが今後の問題でしょう。」と言っておられた。

住友のやっておられる特色は、住友みずからが大学出の普及員を十一名、試験をして採用し（約一〇〇haに一人の割ですから濃密指導といつてよろしい。）それに集荷や倉庫番などの助手をつけて、合計三〇名の現地人を日本人技術者三名で教育しながら使っている。まさにこれは「住友普及事業」とでもいうべきものです。そういう意味ではきわめて特色のあるやり方です。「この三〇名の訓練され

た現地人は住友の宝です」と団長はいつておられました。

しかし米ではもうからないとのことでは、住友はマイロなど畑作に力を入れておられる。マイロの在来種の試験や改良種の試験などにとりかかっております。

農業技術者の現場グループは三名ですが、一人一人が一騎当千のつわものです。気がいだけでなく、ほんとに農業がすきてたまらぬ、といった人たちです。農業協力は精神主義だけではだめだと、住友の現場でつくづく感じさせられました。

技術顧問 柳田友輔 六〇代 農林省OB、前農業機械化研究

所常務理事

イネ、キカイ 松井順三 二〇代 青年協力隊OB（マレーシア三年、キカイ）

畑作 熊谷武典 二〇代 農大卒、アメリカ実習、台湾

事務 田尻肇 二〇代 東京外大、住商

### 西部ジャワ食糧増産技術協力

五月二六日、ボゴールの中央農業研究所に政府ベースで協力する三人の専門家を訪ねました。

イネの栽培法の研修については、三カ月コース三〇人、種子検査は二週間コース、三〇人という単位で普及員を集めて研修をします。使っている建物はフォード財団が寄付したもので、二〇万ドルで新しく作ったものです。それから農機具の人が二人、ジャカルタの東部のスカマンディーにいますが、ちかくボゴール東方のチヘアへ移ります。チヘアというのは一、〇〇〇ヘクタールぐらいある政府の採種農場ですが、そこへケネディ・ラウンドで二五万ドルの日



本の農機具が入ったのです。そこへ移って普及員の農機具研修をやります。

中央研究所では試験圃場を見せてもらったのですが、試験の精度が低いことを日本の専門家はなげいていました。日本のように地域試験場とか各県の試験場があるでなし、末端では県段階に採種農場があり、一〇ha前後の採種田をもっていて、これが試験場の代りをしています。

肥料について一言申しますと、いま一つの施肥設計で全インドネシアのイナ作をカバーしています。土質とか、地力とかを考えない施肥設計です。そこで日本の硫安協会が農業省普及局、ボゴール中央農業研究所、チヘア政府農場などと協力して、西ジャワの一七カ所で肥料試験をやることになりました。一カ所三haで農家へ委託してやります。もちろん、これにはOTCAの専門家も指導に参加します。とにかく、全国一律の施肥法ではないという空気が、いまやつと盛りあがってきつつある、というのがインドネシアの実情でしょう。

西部ジャワ食糧増産技術協力(OTCA)

菅生数馬

元愛知県技監

四三年九月五日  
四六年五月三〇日

船田正明

農林省農業協力官

関 正次

静岡県技師

各務威夫

愛知県技師

芳賀三男

元農林省内原機械  
化センター

ボゴール中央農業研究所  
ネ採種検査、普及  
チヘア政府農場  
農業機械化訓練

### 六カ国語をあやつる赤川君

三菱ビマスのボゴール地区担当で、旧知でもある赤川君がOTC  
Aの菅生さん宅まで迎えにきてくれた。二六日、二七日の二日間三  
菱のみなさんにご厄介になり、普及所や農業高校、展示圃や肥料倉  
庫などを案内してもらった。インドネシア語の通やくはもつばら赤  
川君がやってくれた。

昨年十月にやってきてまだ半年余りだが、インドネシア語がペラ  
ペラである。三五才前後の赤川君は英語もペラペラ。「いつたい、  
あなたは何か国語がしゃべれるか」と聞いてみた。「六カ国語です。  
英語、スペイン語、ヒンデー語、ウルドゥ語、そしてインドネシア  
語と日本語です」という。この赤川君は派米青年でアメリカへ行き、  
メキシカンと三カ年働いたが、その時英語とスペイン語をマスター  
した。その後インドのデモンストレーション・ファームに五年、そ  
の間にヒンデー語とウルドゥ語が自由になったということだ。

彼はそーっと私にカバンを開いて見せてくれた。カバンの中はイ  
ンドネシアー日本語、英語ーインドネシア語、和英、英和など、ぼ  
ろぼろになった数冊の辞書と一冊の植物図鑑だけが入れてあった。  
植物の名はすべて学名を使っていた。

ここに赤川君一人を紹介したが、三菱は赤川君と同類の農業技術  
者をたくさんかかえている。また、それは三菱だけでなく、あちこ  
ちを巡るうちに、住友でも、日綿でも、三井でも、農業技術者たち  
はインドネシア語については不自由していないことがわかった。こ  
とに農民との接触では彼等の現地語は大きい偉力を発揮していた。



### 三菱と現地農家との結びつき

つぎに、三菱のビマス・ゴトン・ロヨンを紹介しましょう。西部ジャワ、二〇県のうちで、三菱が昨年の一〇月から参加しています。三菱が九県、シバが七県、クーバーが四県です。三菱は主として山地一帯、シバは平野地帯を担当してやっています。三菱は、日綿や三井さんよりも一時期早く行ったので、仕事によく慣れているという感じでした。また、メンバーの人数も多くなり、河合氏を团长として、バンドンを基地に頑張っています。九県を担当しているが、各県にひとつづつ、デモンストレーション・フィールドをつくり、農家へ依託してデモンストレーションをやりながら指導をしています。私たちは農家の展示園とともにその農家をも訪ねました。

三菱地区には、アトマカさんとクスタマさんというモデル農家があります。この二人は二年前にビマスの功労者として、日本へ派遣された篤農家です。二カ月間日本の各地をまわっている間に、すっかり日本ビイキになり、先頭に立って三菱の仕事に協力してくれています。「あまりにも日本ビイキすぎて、時に困ることもあるがそのため大変仕事やりやすい。この人達のような現地農家の有力者に日本を見せて日本のシンバを農民の間に作って行けば良い。」と三菱の技術者が言っていました。二人とも、じつに立派な展示農場をつくっていました。三菱ビマスが、こうした展示農場を中心に村々へ技術指導を進めているようで、農家と密着した普及事業だという感を深くうけました。

团长 河合 恒 農林省OB、メコン委、南ベトナムのフ

アンラン農場

副团长 伊計良彦 農林省OB

栽培

赤川克之

アメリカ実習、インド派遣五年、農業自  
営

金平 誠

アメリカ実習、パキスタン派遣、農業

瀬井富雄

アメリカ実習、青年協力隊（フィリピン）

農業

堀内久貴

アメリカ実習、農業

田中建治

アメリカ実習、農業

池田貞夫

アメリカ三年、インド二年

樋口忠家

東京農大、アメリカ二年

農 薬

石川哲雄

日本化薬

金森正剛

くみあい化学

機 械

大木邦夫

三菱重工

久島俊也

倉 庫

秋元典夫

三菱倉庫

### 一年分の肥料があまっている

私たちはガルト県（農業資材配給公社）の肥料倉庫を訪ねたとき、郡段階の P・N・P E  
RTANI（農業資材配給公社）の肥料倉庫を訪ねました。その倉庫は幾棟もつづいて広いのですが、倉庫の中には五、六年前から各国からきた肥料が山積みになっております。一番新しいのは、四月ほど前に入った台湾の肥料、それは、一方に山積みになり、また、三菱の肥料、西ドイツの肥料、オランダ、アメリカ、ソ連、オーストラリアの肥料などが山積みに残っており、スカルノ時代からの肥料は袋がボロボロになっている。そういうものから先に処分しているわけです。これは政府のやっている末端の倉庫ですが、そこから



肥料や農薬を村や部落へ配布しているのです。「尿素の自然結晶というものを初めて実物で見た」と三菱の技術者は言っていました。

肥料の配給の公定価格は一キロ三一円五〇銭。ところが横流ししているものは二一円から二二円ぐらいで、いくらでも買えるのです。また、P・N・ベルタニから出している肥料も、一年前のものは二七円だとか、袋の破れたものは二五円だとか、かき集めの混合品は二三円とかで処分されています。

西ジャワにはおよそ一〇万トンの肥料が余っているということです。インドネシア全体としては、約一カ年分の肥料がP・N・ベルタニの倉庫に眠っているといわれます。

インドネシアの農民は肥料や農薬を使いはじめからわずか十年の歴史しかなく、農民は肥料や農薬の使い方に慣れておらず、生活も苦しいものですから、政府から受けとった肥料を、全部は使わずに横流しします。その横流しした肥料が、ひじょうに安く流れてくるので、政府の肥料はますますストックになるという悪循環がつづいています。したがって、日綿、三井など、今年参加した商社は肥料は扱わず、農薬だけを出しています。

### ピマスをはばむもの

ここでインドネシアのお役人のことに、ちよつとふれてみたいと思います。ジャワ島で一家の生活費は人によってもちがいますが、ほぼ一万ルピア（一万円）ぐらいといわれます。ところが、高校を出て普及員になるとだいたい三、〇〇〇ルピア、大学出は四、〇〇〇ルピアでいいです。ですから、一万円ぐらい生活費がかかるとすると、給料の二倍分ぐらいは別にアルバイトしなければならぬ、という

農家の収入. 0.5 ha  $\times$  14 = 米 1 kg 25 RP ~ 30 RP. 1 RP = 1円弱  
月平均 3000 RP ~ 4000 RP  $\times$  6 ~ 8 人 家族 (20 人 家族 10 人 家族)

のが中央政府はじめ、あらゆる役人、軍人も含めての実情です。だから肥料を横流ししたり、ビンハネしたりすることは悪徳ではなくて、生活のための常識のようになっております。

また、役人の勤務時間も普通朝七時から午後二時までですが、朝八時ごろ出て来て、一時ごろには帰ってしまふ。また、金曜日は回教の聖日でお祈りがあるので、十一時で役所を終わります。土曜日は半日です。あとの時間はアルバイトをやらなくてはならないというのが、すべての役人について言えます。そういう事情だから、生活のためには、そうせざるを得ないというのが、役人の状態であるようです。

だから、汚職、横流し、ビンハネなど、「ビマス計画をはばむものは、役人だ」といつても言いすぎではないくらいの状態であります。したがって、ビマス・ゴトン。ロヨンが中止になつて、うまい汁を吸えなくなるのが役人だ、ということもあちこちで聞かされました。

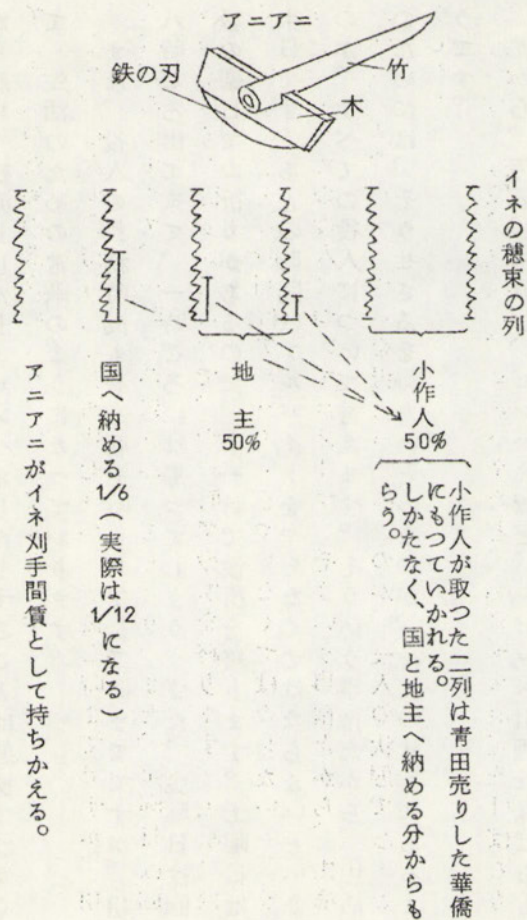
## ア ニ ア ニ

三菱のバンドンから日綿本部のある中部ジャワのスマランまで、車で七、八時間かかって走りつづけました。たいへん良い天気だったので、その間のいたるところでイネ刈りの風景を見たわけです。ジャワ島ではイネを刈るときには、アニアニという小さい刃のついた道具を指にはさんで、稲の穂だけを切りとり、穂の束をつくるのです。稲刈りをやるのは、たいいてい女の人で、このばあい、何人出てきてもこばむことができないのです。これが言わゆる「ゴトン・ロヨン」、相互扶助なんです。



そして稲を刈りにきた人は自分が刈った稲の六分の一を稲刈り賃として持って帰る。これは畑や田をもたない人が多く、どこから、誰が来ようとこばめません。一つの田ンぼに何十人という人が群がって穂をつみとります。この群集のことをアニアニともいいます。さて、アニアニが刈りとったイネの穂の束をどんなふうに分けるかは、図に示したとおりです。刈りとった穂は束にするが、一束一・五キロぐらいの穂束を六列に並べます。その一列すなわち六分の一が刈った人、つまりアニアニが持ち帰ります。政府へおさめるのが次の一列( $\frac{1}{6}$ )。もしイネを小作人が作っていたとすると、小作人は残りの四列のうちの二列を自分のものにし、他の二列を地主に納めます。ところが小作人はたいていのばあい、華僑の精米業者あた

一束 1.5  
キロのイネの束を大列にならべる



りに青田売りして、金を前借りしているのです。だから收穫物はすぐ華僑にもつていかれてゼロになります。背に腹はかえられず、やむをえず、政府におさめる分から相当の量をこそつと自分のものにする。また、地主へおさめるのをいくらカビンハネして自分の食糧にしなければならぬ。

もちろんアニアニ（イネを刈った人）は、その束の大きさややつを並べて六分の一といつても、できるだけ沢山もつて帰る。だから、けつきよく政府へおさめる六分の一というのが、国全体からみると五〇%、 $\frac{1}{6}$ でなくて $\frac{1}{12}$ になってしまう。これが政府の昨年の三、〇〇〇万ドルの赤字の理由です。これは監督のしようがない。坪刈りするわけでもなし、どれだけとれたかをしらべるわけでもないのです。アニアニは貧しい庶民相互の一種の生活保障、生活権だといえましょう。

アニアニは西や中ジャワでは $\frac{1}{6}$ をとるが、土地をもたない農奴の多い東ジャワあたりでは、アニアニの取り分はもつと少く、 $\frac{1}{8}$ か $\frac{1}{9}$ になります。スマトラあたりになると労力が少いから $\frac{1}{4}$ ぐらいをアニアニがもつて帰ります。とにかく、これが相互扶助、ゴトン・ロヨンで、こういった社会慣行をどうしてもこわすことができないところに、インドネシア農業の大きい問題点があるのです。ピマス・ゴトン・ロヨンが廃止され、将来どんな制度に変わるとしても、このような慣行があるかぎり、容易なことではないという感じがします。

### 日綿はクーバーとはちがう

ここで話をすすめて、中部ジャワを担当している日綿チームについて述べましょう。この地区はもととクーバーがやっていたので



すが、クーパー社については今、裁判沙汰がおきて、たいへんな罰金を払わせられて、どうやら解決したらしいのです。

このクーパーの後を日綿が引き受けたわけですが、農民たちは、「クーパーのようなやつが、また日本からやって来たのだろう」と、警戒しながら日綿に対しての、仕事にとりかかるまでの交渉がひじょうに難行しました。村の人たちに「集まってくれ」といってもなかなか集まってもらず、警戒心がつよくてビマス参加の契約も遅々として進まなかつたのです。ところが、「この村は何ヘクタールビマスに参加するか」ということについては、けつきよくは県知事の権力で決定するわけで、最後には村長が割りあてるのです。県知事というのは、たいてい現役軍人か予備役軍人です。

命令でできますのですから、いや応なしに四月から日綿の仕事が開始されました。ところが、いざ始まってみると日本の日綿は大変よかつた。「こんなに足を運んで巡ってくれるのなら、もつとゴトン・ロヨンに参加するんだつた」というのが農民の声です。

先だって、スハルト大統領が国会議員とともにおしのびの平服でやってきて、日綿の指導現場をみられた。ちょうど、苗代づくりの指導をしていたときで、日綿の技術者たちが、水田の中へはいって泥まみれでやっているのをみて大変感動したらしく、新聞にも写真入りで出るし、ビマス・コントロール・ボディの親方にも伝つて、日綿はたいへん面目をほどこしたということです。

待っていたジープが内地から到着して機動力もつき、いま、やつと活動を開始したという状態です。日綿は人数が少いのですが、ひじょうに良くまとまっていたいいチームだと思えます。それから、内原の鯉淵学園の坪野教授が団長格で行っており、この人は土壌・肥料

の専門ですから、いたるところから土を持ちこまれ、分析をたのまれて悲鳴をあげていました。これは簡易分析ですが、土の分析をして、それに応ずる肥料の設計をしてやるわけです。たいへん忙しいのでした。

ビマス中止でさぞガタガタしているだろうと思つた各社の現場の方はどこでも、案外落着いて仕事していました。与えられた期間、インドネシアの農民のために、ありつたけの力をつくしたい、というのが現場の技術チームの気持のようでした。

団 長 佐野 五郎 日綿ジャカルタ出張所長  
土・肥 坪野 敏美 鯉淵学園教授

裁 培 中渡瀬清香 前 鹿児島農試

虫 害 吉田 進 日本化薬上尾研究所病害虫研究室長

農 機 田畑 実 日綿化学品部 農薬課

裁 培 飯村 富彦 前OTCA茨城国際センター職員

白井 英夫 アメリカ実習、青年協力隊（フィリピン、イナ作）

病 害 鈴木 茂 日本化薬上尾研究所

竹内 可能 日綿化学品部農薬課

寺田 和夫

現地人二人

### 村長なる者

日綿が苗代をつくつていた田は村長があずかっている水田です。村長は六年ごとに選挙で選ばれます。村長になると村から水田を提供される。日綿地区で私たちが訪ねた村長は7haの水田を与えられ



ていました。その收穫物が村長の俸給になるというわけです。あるところでは四ha、別のところでは五haでした。村長は六年間ですが、村役場というのは村長の家で、役場の職員は誰れもおりません。その村長が肥料を配給したり、糶を集めたりする責任者です。スタッフはいない、倉庫もない、トラックもない。そんなことはおかまいたしにP・N・ベルタニから村長の庭へ肥料がどさつと運びこまれる。また、イネ刈りが終われば、農家の収かくの1/6も村長の庭へ運びこまれる。肥料でも、モミでも、相当部分が村長の家の庭で行方不明になるということをたびたび聞かされました。

#### クラテン方式（西ドイツ政府ビマス）

日綿チームに別れをつけ、ジョグジャカルタから三井チームのいる東部ジャワのマデウンへ向いました。その途中にクラテン県というところがあり、そこでタニ・マムール計画というのが行われています。これはインブルーブド・ビマス（改良ビマス）といわれており、ビマス・ゴトン・ロヨン廃止後のビマスの一つの形として取りあげられる、ということを知っていましたので、そこを訪ねました。

西ドイツ政府が肥料、農薬、農機具を三カ年にわたり、一二〇万ドル分を一九六八年からグラント（贈与）しているが、その肥料、農薬、農機具を使ってビマス計画を進めているのです。そこにはドイツの政府派遣の人が三人おり、そのうちのチーフは、三年目になるので、三カ月の有給休暇をとって、ドイツへ帰っていました。それで、いま二人だけで指導に当たっていました。この点は日本の政府民間ベースの派遣が大いに学ぶべき所と考えます。そこには

USAIDからも肥料、農薬が来ています。とにかく、贈与された肥料、農薬などを使ってビマスをやリ、政府ベースの人から技術指導をうけるというのが、このクラテンのダイナミール方式です。私たちはクラテン県の普及事務所を訪ね、いろいろ話をききました。

そこの話では、クラテン地区には日本から小型トラクターが八〇台入っているそうです。ところが、私たちの八日間のジャバ縦断旅行中に、日本の小型耕耘機が動いているのを見たのは、たった一度、このクラテンで代カキをやっているのを見ただけでした。あちこちに飾ってあるのを見たが、インドネシアでは農機具はまだ飾り物の段階のようです。

### IRISこつぜんと現わる

クラテン地区を車で通って、たいへんおどろいたのは、私たちが最初から注意しておった新品種、IRISがこつぜんとして道の両側に現れてきたことです。私たちが車の窓からみたのでは、まず四〇〜五〇センチくらいは作っているのではないか、と思われました。

これまで旅行したところでは、ジャカルタ東部の住友の地区ではもちろん、ボゴールからバンドンにかけて三菱の西ジャワ地区でも、中部の北海岸や日綿の地区でも、展示圃以外には新品種はぜんぜん見かけなかった。それが急にクラテンに現われたのです。

クラテンの普及所で聞いてみると、「この地区では新品種が八〇％普及している」ということで、たいへんびっくりさせられました。それと同時に「ドイツの連中は、いいところを選んだなあ」という気持ちもわきました。私たちは「ドイツの連中はうまいところをつまみ食いしている」と端息をもらしました。



## 新品種の導入一〇〇%と〇%

クラテンを過ぎてからは、眼を皿にして車の窓から新品種を追いつづけました。間もなく三井グループの本拠マデウンへ入りました。マデウンへ着くなり、新品種のことを確かめなくてはとおもい、「三井地区では、新品種はどのくらい作られていますか」と、まず聞いてみました。そのことが私たちの一番の問題になって来たものからです。すると、「多いところでは一〇〇%作っている。しかし少いところはゼロで、その間に三〇%のところ、六〇%のところなどもあります」とのこと。その地域によつて新品種の入り方がまちまちであることを知つてさらにおどろきました。「なぜ一〇〇%の地区と〇%の地区ができたのか」、われわれなりに、その原因をさぐつてみたいと思ひました。そこで三井のチームをお願いして「もっとも農業の遅れた地帯の農村をみせてほしい」と申し入れました。そして倉本団長の案内で二時間ほど、ジープで北に向つて走り、石灰岩地帯で、土地も悪く、作物も貧弱な地方を訪ねました。もつとも農業の遅れた地帯に新品種が入っているかどうかを、たしかめるために行つたわけです。ところが、新品種はぜんぜん見つかりませんでした。

新品種について、その後に見たものをつけ加えますと、東部ジャワ、南部のブリッター、ここはスカルノ前大統領がほうむられたところ、この辺は農業の進んだところと聞いていたが、多いところでは六〇%、七〇%ぐらい新品種がみられました。それからスラバヤの近くはほとんどなく、バリ島へあがつた西海岸では、新品種は少しが見かけられました。それから、ずっとバリ島内部には新品種がなくて、デン巴萨ールの近くに、少しばかり見かけられた。

一方、スマトラのランボンでは、三菱ビマスが指導しているが、このあたりは、だいたい四〇%ぐらい新品種が入っております。さらに、北スマトラのトバ湖の東の方は稲作水田地帯なのですが、八〇%から九〇%新品種が入っております。IRI5というのは一九六七年にフィリピンの国際イネ研究所(IRRI)で発表された品種ですが、この地方へ入ったのは一九六八年だそうです。スマトラのメダンあたりは、ビマス計画をやっていないのですが、農民自からを選んで新品種をつくっているとの話でした。この地方はブランテーションの影響か、意外に農業が進んでいます。

## 二つの農業協力理論のはざま

ここで少し議論めいたことを申しあげることをお許しください。IR系のイネだとか、メキシコ系の熱帯小麦などが数年来出てきて、ここ一二年來、これはグリーン・レボリューションだ、緑の革命だといわれています。そして新しいイネやムギの品種が世界の食糧問題を解決する鍵になりはじめています。そこで、農業の技術協力について、従来の理論と新しい理論との二つの対立が出はじめています。

従来の理論からいうと、農業のたいへん遅れた地帯や国に、高度の技術や近代化された品種をもちこんでみても、とても受け入れられないし、消化できない。まず農民の技術をレベル・アップしてから入れるべきだ、というのが、これまでの考え方でした。

それについて、緑の革命などといって、新しい品種が農業の遅れた地帯に広まりつつありますが、テクノロジカル・インパクト、すなわち技術的刺激を与えることによって、農業の改良が進められ



る。たとえば、IR15が新しく導入されたとする、その品種そのものは耐肥性だが、肥料を沢山やらなければ収量はあがらない。また病気や虫に弱いから病虫害の防除をやらなければだめ、かんがい排水もうまくコントロールしなければだめ、つまり、高度の集約的技術を必要とします。新品種が入ることによって、その刺激により、その圧力によって、その地域が肥料を使い、農薬を使い、灌排施設をととのえ、というような農業の改良へ、いやでも追いこまれていく。これをテクノロジカル・インパクトといっています。いつてみれば、ジョック療法みたいなものです。

インドネシアには、こうした二つの考え方のいずれかがあてはまる地域があるようだし、その二つの地域のはさまが現実に見られるようです。農業がかなり進んでいるところでは、新品種を入れる能力がある。ところが、ひじょうに遅れたところは、肥料、農薬をもらっても、とてもそれを使いこなせない。だから横流ししてしまうというふうな問題がいたるところにおきる。ところがクラワン地区のように、IR15を入れようとしたが、タマバエの異状発生のためベシヤンコになったところもある。とにかく、この二つの理論の何れかにあてはまるところをたどってみると、おぼろげながら両理論の境界線が引かれるようです。

この問題はもつとつこめば、「農業協力をどのように考え、進めていくべきか」という課題だが、それをインドネシアの稲作が問題提起してくれているような気がする。そんなことを考えながら二日間と厄介になったマデウンを去ったわけです。

### 三井は何をくれる？

マデウンの三井グループについていえば、ここはスイスのシバとドイツのヘキストの後始末にたいへん困っています。日綿がクーバーの後始末に手こづつたごとくに。ところが、三井の方も仕事を進めるにしたがつて、やはり「日本の技術者というのは、きめこまかに動きまわり、ていねいに現地指導してくれる」という評価を高めています。

農民たちは、「シバは金をくれた、ヘキストは物をくれた、三井はいつたい何をくれるんだ」と問いかける。そういう言い方が農民の問いなのだそうです。で「三井は技術をあげる」と答えて、つよくつばねているんだそうです。というのは、前のシバやヘキストがいろんなものを与えたということが災いしています。そのやり方を変えることに三井は必死になっているというのが現状です。三井の技術者たちの言うには、「あまり高度の技術者でなくていいから、日本の農業改良普及員あたりの実際のわかる技術者を、どんどん日本から送ってもらえたら、ほんとにこの国に役にたつのだが」ということをしみじみもらしておりました。

東部ジャワではアニアニの群がいたところで収穫をやっていたが、東部ジャワでは土地をもたない農奴が一〇〇万人もいるのと、それからこの地方では小作と地主は五〇％。五〇％で収穫物を分けているようです。しかし山地帯では、小作への分け前の方が多くなつて、小作の方が六〇％とるようです。山地帯はビマス・ゴトン・ロヨンをたいへん喜んでいました。というのは、今まで肥料を買うにも山地帯へ運んでくれる人がいなかった。ところがビマス・ゴトン・ロヨンは村まで肥料を運んでくれるというようなことで、



たいへん好意をもっているようでした。

三井グループ（一九七〇年四月よりBIMASG・R・参加）

チームは三井東圧で編成

団 長 倉本慶市 前、三井東圧福岡肥料課長

土・肥 長谷川奎治 元、広島県農試

栽 培 坂巻光一 三井東圧KK

病 虫 小川三郎

農 機 大隈 旭 共立農機

栽 培 中野 宏 アメリカ実習、青年協力隊OB（マレ

ーシア、イナ作）

河原井 三井物産嘱託（現地人）

### カランカテス・ダム

三井のマデウンから南まわりでマランに向うと途中でカランカテスのアース・ダムの工事現場に行きあたる。ここは日本工営と鹿島建設がやっておられ、来年（一九七一年）完成を目前に、いま堤防づくりの突貫工事が進められています。

ブランタスの荒れ川をせきとめ、多目的に利用すること、六四年から工事にかかり総工費二〇〇オクドル、いま鹿島建設から六〇名、日本工営から一二名、インドネシア政府から一五〇人、工員、人夫合せて二、〇〇〇人とのこと、日野のトラックが土とり場と堤防の間をひっきりなしにピストンしていた。また、小松のブルドーザは堤防上を走りまわっていました。トラックのタイヤがすごく傷むらしく、ブリτζストンのタイヤ修理工場も忙しく動いていました。

このダム完成のあかつきには、ジャバ東南部の農業地図も大きく塗りかえられることでしよう。そのことを期待したいものです。

ここで感じたことはトラック等の車輛と現地人係員の管理が大変上手に行っている様に見られました。然し案内された技術者は「我々の立場は辛い、工営、鹿島の日本人技術者はアドバイザーであるので現地人の工区長等にこの時期にこここでやり上げないと工期に間に合わない」とアドバイスしてもなかなか動かないから結局は直接指図して仕事を間に合わせるとインドネシア側から越権として文句を言われる。然し工期に仕上る責任は我々にあるので全く辛い」ともらされていたがこれは農業プロジェクトにおいても同じことが言えるようであります。

#### 東部ジャワとうもろこし開発指導（OTCA）

東部ジャワのスラバヤとマランに政府ベースでトウモロコシの開発に五人の専門家が協力しています。小室さんら三人はスラバヤで集荷、検査、輸出、山崎さんら二人はマランで栽培の指導をやっています。

米についてのビマス・ゴトン・ロヨンがうまくいかない。それと同じことがトウモロコシの集荷についても言えるらしく、トウモロコシの集荷について、さんさん苦労しています。その要点を申しますと、米のばあいと同じ問題があります。たとえば、トウモロコシを穫っても置場も倉庫もなく、雨ザラシになっている。そのうちに腐ったり、発芽します。輸送のためのトラックもない。輸送はほとんど華僑が独占しています。また、そうした集荷や運送をマネージする人がいない。



米のばあいも同じです。政府公認の華僑の精米所までは二〇キロもある。村長が責任者ですが、村長が仲買人になっていることもある。村長も同じ穴のムジナかもしれない。ビマス・ゴトン・ロヨンはどんな方法を考えてみてもうまく行きつこない、というのが結論のようです。

トウモロコシ農家もけつきよく、華僑へ青田売りして、金を借りているから、トウモロコシが出来ても、すぐ全部華僑にもつていかれる。華僑へ青田売りすれば月の利息が一二%です。銀行で金を借りればよいのですが、その手続きがたいへんです。一、〇〇〇円借りる手続きに、まず三日はかかる。農村では親父サンたちは九九%まで文盲とみてよい。書類が書けないので銀行から金を借れない。それで、どうしても華僑から借りる。そして収穫物はすぐにもつて行かれてしまう。

今、OTCAから専門家が行っておりますが、けつきよく村の末端に協同組合（単協）をつくり、そこに職員をおき、倉庫をつくる。そして、一〇〇の単協をもとに郡の段階で連合会をつくる。そうした「農村末端の基本的なことからやらないことには、トウモロコシだって、米だってうまくいくはずがない」とOTCAの専門家たちがなげいておられた。そして具体的にまず末端の単協づくりから始めて、トウモロコシの栽培奨励や集荷の指導をやることを計画しています。そのためには、さらに期間を三カ年延長する必要がある、と日本政府へも延長の意見を出しているようです。

東部ジャワトウモロコシ開発専門家

小室英一 海外貨物検査 KK 四三年四月四日

四六年四月三日

安田主計 OTCA 開発技術協力室

Surabaya  
とうもろこし集  
荷、検査、輸出

清水俊夫 全購連

山崎俊次 北海道立中央農試

四三年四月三日  
四五年四月三日

Long 駐

菅 伝吉 北海道民間

栽培指導

### これからのBI-MASの方向

私たちはジャワ縦断の旅を終えた翌日、ジャカルタで農業省にビマス統制本部を訪ね、今後のビマスの方向を打診した。結論を総合すると次のとおり。

ビマス・ゴトン・ロヨンは今年の乾期かぎり（九月）で中止すること。ビマス計画の面積は前年と変らず一三〇万haぐらい、そのうちの二〇万haだけはクラテン方式でやる。つまり外国政府から贈与をうけた肥料、農薬、農機具などを使ってビマスを進め、それについては、政府ベースの外国技術者チームの指導をうける。残りの面積はビマス・ナシヨナルによる。農家グループに対する指導は普及員、農科大学学生、農業高校生徒などによる普及チームが責任をもつ。

P・N・ベルタニについては前に肥料の所で述べたとおりだが、農民銀行が地方に進出して、農民に種子、肥料、農機具などのクレジット（商品券）を出す。と同時に、村の末端（五〇〇、一、〇〇〇ha対象）に資材配給の小さい店（KIOS）を開き、また事務所と倉庫を建てる。倉庫には農民のモミを保管し、早売り防止のために、七〇%の前払いをしてやる。これはビマス・コントロール・ボデーが村の段階まで進出することを意味する。思うに農民銀行はたしかに進出だが、P・N・ベルタニの後退という印象をうける。

外国から購入する農業生産資材は商業省が、P・N・ベルタニ、



P・N・ベルタミナ、P・N・ブスリその他によつて輸入させ、地方へ配達させる。農村の末端では農民銀行が進出してクレジットを出し、資材を配給し、モミを集荷し、また金を集めるなどの末端業務を行う。

こうしたやり方はジョクジャカルタ方式 (Jogjakarta Improved BIMAS Pilot Project) とよばれてゐた。

日本の技術チームの多くの人たちは、こうしたインブルーフト・ビマスがはたしてうまくいくか、どうか、たいへんあやうんでいました。というのは、インドネシアでは「いつも、計画と実行とがうまくかみ合わない、計画はよくても、実行ができないのだ」となげられてゐました。

### 農業改良普及事業の質と量

ビマス計画は前にも述べたように画期的な普及教育事業で、農民のグループ活動と、そのグループにたいする技術指導をねらつたものです。

そこで普及事業の実情をみますと、普及員の数は各郡に一名ていどです。郡は日本の郡よりも大きいので、普及員一人で耕地約

一〇、〇〇〇 ha を担当しています。しかも技術だけでなく、行政面や統計のことまでやっています。比較のため日本の農業改良普及員について言いますと、一人あたり平均して耕地六〇〇 ha 程度を受けもちます (日本の全耕地 六〇〇万 ha に約一万人の普及員とみて)。日本では農協の営農指導員も相当数いますから、それを入れると一人あたり三〇〇 ha か四〇〇 ha になりましょう。

インドネシアでは一万ヘクタールに一人の普及員が、農科大学の学生と農業高校の生徒の協力をえてビマスの指導を進めています。農業高校の三年生は六カ月泊りこみで、ビマスに参加しています。もつとも村には、村長の委しよくにより一、二名の篤農家が地域農民の技術指導に当たっています。これをバモンタニとよんでいます。この方があんがい効果をあげているかもしれません。

とにかく、こうした直接農民を指導する組織を量、質ともに強化することがビマス計画を成功にみちびくカギです。その意味で日本の商社の農業技術チームは高く評価されています。ところが、そのチームも九月かぎりで引きあげることになりました。まったく残念でなりません。

私たちは農業省の普及局を訪ねて、農業普及部長と農業教育部長に会い、農民の普及教育について懇談しました。普及員の教育研修については三三種類の研修コースを計画し、努力しています。その中のイネ栽培、採種技術、農機具などについては日本政府派遣の技術者が協力していることは前にのべたとおりです。

普及部長も農業教育部長も共通に言っていたことは、(1) 普及員を研修する技術者が少ないこと、(2) 教育研修の教材や機材が足りないこと、とくに(3) 研修のために一カ所へ集める旅費や合宿費など研修運営費の不足で、けつきよく計画だおれになること、この三つの不足のために効果的な研修がでない、ということです。

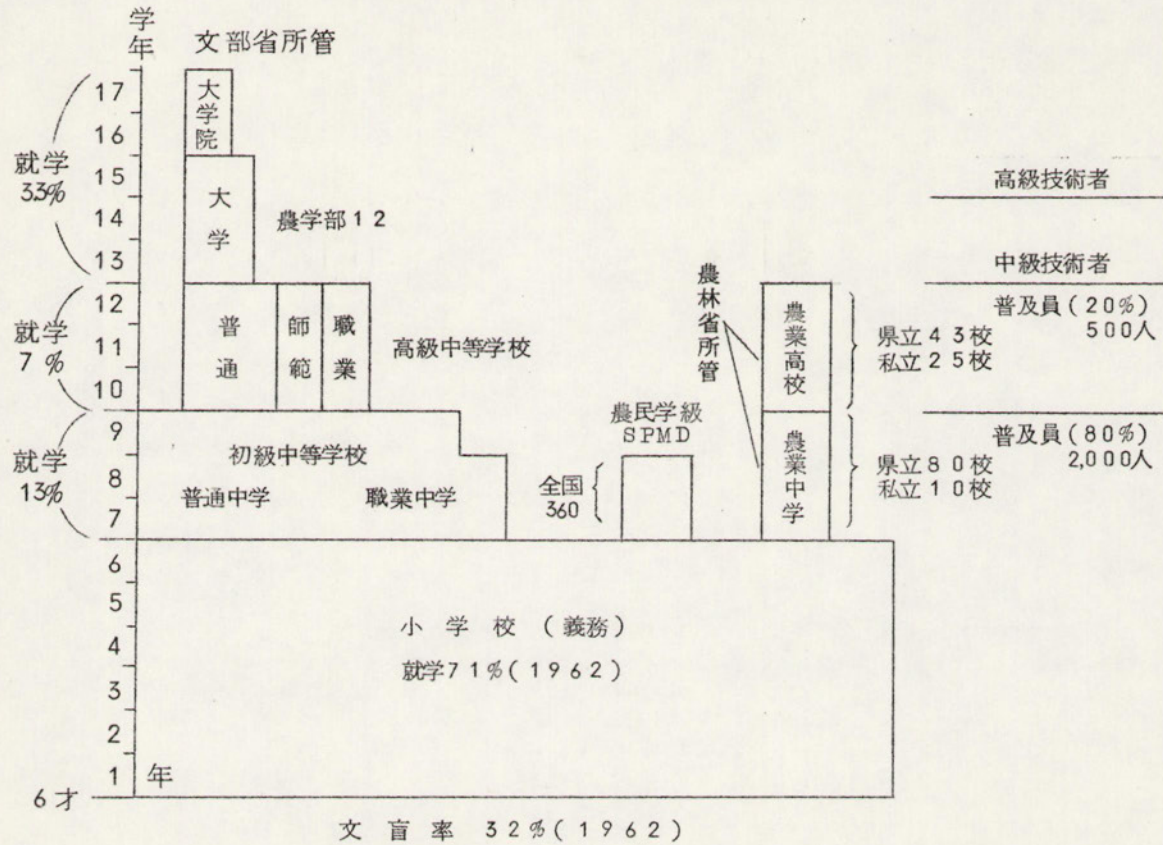
「もし日本が協力してくれるなら、そうした三不足をカバーしていただきたい。農民たちはまだ、肥料や、農薬や、農機具をつかう近代的な農法になっていないのです。これを農民に教えることがだいじです。そのために農民の指導者である普及員や農業高校、農業



中学、農民学校の先生たちの教育がまず先決です」とこもこも述べておられました。農民学校 (SPMD - Training Center for the Farmers) は全国に三六〇カ所もあるのですが、施設も教材もまったく不足しているようです。

「普及員や農民指導者たちの訓練については、どこかの国が援助していますか」との私たちの問いにたいし、その答は「ノオ」で、農業教育部長のハルジョノさんは首を横に大きくふった。そして「外国の人たちは眼につくような派手を援助はするが、私たちのほしいのは、もっと地味なことへの協力がほしいのです」と、かつて日本で一年間農業の勉強したことを想い浮べているようでした。

# インドネシアの学校系統図と農業普及員





これでジャワ島の調査報告を終わります。次号においてはスマトラ、  
タイ等の報告をいたします。

## ビマス・ゴトン・ロヨン中止の閣議決定

(ジャルタ・タイムス・一九七〇、五、一一)

### 担当閣僚会議から

昨日の担当閣僚会議で、政府は Bimas Goton Rojong を中止することを決定したようである。農務大臣 Thojib Hadiwidjaja は次のような新聞発表をした。

この決定はルビーに十分な信用がついたこと、および農業の下部構造に貿易の融資が利用できるようになったこと、ならびに農業技術の情報に農業技術者が学生の協力で充分活動しうるようになったことが根拠である。また、Bimas Gotong Rojong を中止したもう一つの理由は、加工と流通を兵站局 (Logistic Bureau, 略して Bulog) と協同組合が取扱いうるようになったことである。

Bimas Gotong Rojong が終ることになると、農業振興は Bimas, New Bimas, Inmas および New Inmas で行うこととなる。

Bimas Gotong Rojong 計画は、一九六六年にはじまり、貿易収支のために肥料、殺虫剤等の下部構造が面積の増加にまにあわないうきにとつた措置である。そのために外国の私企業に農業の下部構造を供給してもらい、延払にする条件で導入したものである。外国の企業としては、Ciba, A.H.T., 三菱, CooPa 三井、および日綿である。

農務大臣は一九七〇／七一年の米の生産目標は、一一・四百万トンで、一九七三年／七四年の目標は、一五・四百万トンであるという。

外国の企業の農業機械の一部は政府が買収することになるであろう。



# ビマス・ゴトン・ロヨンの廃止と食糧計画

五月二〇日政府は来る雨期作（九月～三月）から外国企業との協力によるゴトン・ロヨン・ビマスを廃止すると発表した。説明によると外国企業の協力を得なくても資金、流通網などが整備されてきたことをあげているが、実情は反当投下資金量の大きいこの計画にたいして農民の返済能力が伴わないことと、このことによる政府の財政負担の増大に主たる原因があるようである。

ゴトン・ロヨン・ビマスは一九六八／六九作付年度（九～三月雨期作）にはじまつたがその面積は、同作付年度八〇万ヘクタール、六九年乾期作五五万ヘクタール、六九／七〇年雨期作一〇六万五〇〇〇ヘクタールと政府による一般ビマスの累積面積八六万八九四六ヘクタールをはるかにりようがするにいたつた。そしてこの計画に参加する外国企業もチバ・ヘキスト、AHT、コーバ、三菱、三井、日綿と多くをかぞえるようになった。ところが同計画が拡大するにつれて上記のような問題がでてくるようになり今度の政府による廃止措置がとられるにいたつたものである。

この結果政府の自国米配給計画はおおきな影響を受けることになりそうである。過去の政府米買付け実績は、次のとおりである。

## 一、政府の米の買付 (単位トン)

供給源	一九六七年		一九六八年		一九六九／七〇年	
	計画	実績	計画	実績	計画	実績
輸入 (通常輸入)	六〇四八三一	一〇三〇七三	四〇〇〇〇〇	二〇〇〇〇〇	二〇〇〇〇〇	二〇〇〇〇〇
国内買付	五九六六一四	五〇三七〇四	六〇〇〇〇〇	八三〇〇〇〇	八三〇〇〇〇	八三〇〇〇〇
既存ストック		二〇六二三〇	一五二二一七	四一〇〇〇〇	四一〇〇〇〇	四一〇〇〇〇
前年繰越分		二四三四一五	一四二〇七九			
合計	一一一〇一四四五	一〇五六三三三	一四九四一九六	一四九四一九六	一四九四一九六	一四九四一九六

一九六九年における米の買付実績（トン）

a 六九年初頭のストック

四七三、四五〇

b 前年輸入繰越分

（PL四八〇） 一五五、二七七

（通常輸入） 三四、八四〇

一九〇、一一七

c 国内買付米

（現金買付け） 一八六、〇〇〇

（ゴトンロヨンビマス） 六八、〇〇〇

二五四、〇〇〇

d 六九年輸入契約高

（PL四八〇） 三三二、五五八

（通常輸入） 四〇一、三八〇

（食糧援助） 三六、五一七

七七〇、四五五

e 六九年輸入実績

三七八、九八四

三七八、九八四

f 七〇年繰越高

三九一、四七一

一、二九六、五五一

合 計

一九七〇会計年度における米の買付け計画（七〇年四月～七一年四月）

一 七〇年四月のストック

三一八、五〇〇

二 六九年輸入の繰越分

PL四八〇

五二、〇〇〇



食糧援助

三〇、〇〇〇

通常輸入

二〇、〇〇〇

一〇二、〇〇〇

三 国内買付け米

現金買付け

五〇〇、〇〇〇

ゴトン・ロヨン・ビマス

一二〇、〇〇〇

(現物換算)

六二〇、〇〇〇

四 輸入計画

PL 四八〇

四五〇、〇〇〇

食糧援助

五〇、〇〇〇

通常輸入

一〇〇、〇〇〇

六〇〇、〇〇〇

合 計

一、六四〇、五〇〇

以上にみられるように政府の計画では、国内米の買付け強化によつて手持米を増加していくことを目指してきた。特に一九六九／七〇会計年度においてはそれまでの実績を二〇数万トンも上回る買付け計画を立てたが、これはビマス計画の成果に期待したためであつた。ところが今回のゴトン・ロヨン・ビマスの廃止によつて一九七〇会計年度計画の一二万トンの調達は政府が自から行なわなければならなくなつた(六九年のゴトン・ロヨン・ビマスによる調達高が六万八〇〇〇と少いのは現物のほかに金納を含むためと思われる)。もし政府がこのゴトン・ロヨン・ビマスの地域(六九年雨期作約一〇〇万ヘクタール、七〇年乾期作で四〇万ヘクタール)を政府ビマスに編入しようとするれば、肥料等の流通機構の設置、農業普及員の増強、資材管理、金融等行政機構の改善等現段階ではもつとも困

難な諸任務を肩代りしなければならなくなる。またこのための費用の調達も残された問題である。したがって政府がゴトン・ロヨン・ビマスの廃止といつても全廃を意味しているのかどうかは今後のなりゆきを注目する必要がある。

(アジア経済研究所 松尾 大)

#### 畜産関係の外資進出ーインドネシア

四月現在畜産関係の外資合併による投資認可額は二五〇万ドルにのぼっている。関係企業名はヴァージニア・インターナショナル社とレキタ社の合併(一九〇万ドル)、ユナイテッド・ライブストック・サービス社とシドラップ社(五〇万ドル)、東洋物産とマンギス社(一〇万ドル)である。しかしこの他にもラルストン・ブリナ社(香港)が現在認可申請をしている。これら各社はそれぞれクバン地域での食肉加工、ラバン地域(南スラウエシ)での畜産飼育、ボゴール地域での畜産飼育を行おうというものである。

この他オランダのフリーセ・フラック社、オム・ヘドウム社(オランダ)と現地資本マントラスト社三者が製乳工場の設立を検討している。

また世銀は食用畜産産業に対する援助の一貫としてバリ、ロンボック、チモールに専門家を派遣している。

(ビジネスニュース五月十五日)

#### 飼料増産総合計画ーフィリピン

このほど農業関係三機関ー国家食糧農業審議庁、農業信用局、作物局ーは要旨次のような飼料増産総合計画を作成した。



Ⅰ 資金総額二、一〇〇万ベソ。うち一、一二三万ベソは種子、接種材、肥料、農薬、除草剤、ホルモン等の調達に、九八四万ベソは種子生産者に対する信用供与に使用する。

Ⅱ 対象作物。①イエロー・コーン、伝統的生産地域九州に七〇〇七一年度七万ヘクタール作付、②さとうもろこし。準限界地域に作付。③大豆、とうもろこし生産地域および高地に作付。

Ⅲ 流通は十九州で活動中の農業協同組合（各組合は二四〇万カバンの倉庫をもつ）を通じて行なう。プロジェクトの目標は、①農閑期の現金収入確保、②飼料自給による外貨節約、③飼料コスト引下げにより、農民に追加所得取得のため家禽、畜産品生産を奨励する。④飼料用とは別に、大豆増産により、大豆ソース、ペースト、ミルク、チーズ、カード・オイル製造産業に原料の大豆副産物を供給する。

### ビルマ林業の状況

ビルマは一九三六年から一九四一年の間に木材二〇万トンを経輸出し三千万チャットの収入を得たが、一九六八―六九年は一三万トンを輸出し、二億チャットを得た。

ビルマの森林は年間チーク材四五万トン、堅木材四〇〇万トンを生産しうるが、木材向はチーク三〇万トン、堅木材七〇万トンを切出しているにすぎない。

生産は資材不足と輸送の困難から戦前レベルに達しない。また戦前は六千頭の象がいたが、現在木林局は象三千頭と水牛一万三千頭がいるにすぎない。

木材局は二六の国営製材所、五五の国有化製材所、二二二の賃加

工製材所を經營している。

製材能力年間七万六千トンの新製材所がラングーンに建設中である。

また三つの合板工場が年間七、六〇〇トンを生産している。

輸入「にかわ」が経費の一二%を占めるので、その国産化が研究されている。



この数字のなかで、ビマス、ユトン、ロモン、Bimas Gotong Rojong (Cooperative Bimas) すなわち joint venture With National/foreign Companies 国内および外国の商社との共同ビマスは一九六八/六九年から国内および外国の商社の協力を得て次のように進められた。

作 季	計 画	実 績
1968/69 雨季	300,000 <sup>ha</sup>	298,592 <sup>ha</sup>
1969 乾季	550,000	実 施 中
1969/70	1,085,000	実 施 中

その内容を詳しく紹介すると、次のとおりである。一九六八/六九年雨季より発足した。

作 季	名 称	面 積	地 区
1968/69 雨季	Bimas G.R.CIBA	300,000 <sup>ha</sup>	西部ジャワ
			中部ジャワ
			東部ジャワ
1969 乾季	Bimas G.R.CIBA	150,000	西部ジャワ
			中部ジャワ
			東部ジャワ
	Bimas G.R.COOPA	250,000	西部ジャワ
			中部ジャワ
	Bimas G.R.HOECHST	100,000	東部ジャワ
			西部スマトラ
	Bimas G.R.A.H.T	50,000	西部ジャワ
			中部ジャワ
			東部ジャワ
1969/70 雨季	Bimas G.R.CIBA	400,000	西部ジャワ
			中部ジャワ
			東部ジャワ
	Bimas G.R.COOPA	150,000	西部ジャワ
			中部ジャワ
	Bimas G.R.HOECHST	250,000	東部ジャワ
			西部ジャワ
	Bimas G.R.MITSUBISHI	225,000	ランボン
			西部ジャワ
	Bimas G.R.A.H.T.	40,000	西部ジャワ

#### 四 プロジェクトの財政的基礎

##### 1. 一九六四／六五年のデマス Deas および 一九六五／六六年の

ジャワ Bimas

- 農家にたいする生産資金—農業銀行 B.R.I (the Agricultural Bank) から貸出される。
- 借金の返済—現金
- 生産資材—農業公社 P.N.Pertani (Agricultural Public



Enterprise) より貸出または配給される。

2. 一九六六および一九六六／六九年のビマス

○ 生産資金―国立兵站本部 KOLOGNAS すなわち B.U.L. (the National Logistic Body) より貸付けされる。

○ 借金の返済―物納（穀または米で）

○ 生産資材―農業公社より貸付または配給される。

3. 一九六七／六八年以降今日のビマス 一九六五年とおなじ方法がとられることになった。

○ 生産資金の貸付―農業銀行で行う。

○ 借金の返済―現金

○ 生産資材―農業公社が貸付または配給する。

4. 一九六八年のはじめ政府は貿易面で生産資材（肥料、農薬、撒布機）を輸入することが、ビマスの面積が拡大するにしたがつて困難になつてきた。この問題を解決するためにビマス、プロジェクトに外国の私企業の参加を求めることとなった。

5. 一九六八／六九年および一九六九年のビマス、ゴトン、ロヨンでは、生産資材およびその他のサービスの外国商社が貸付けまたは供給し、その分だけを政府が一年の短期の融資をうけることとなつてゐる。このプロジェクトに参加した農家はその借金を穀物の物納で政府に支払うことになつてゐる。

6. 一九六九／七〇年のビマス、ゴトン、ロヨンではその方法が変つた。このプロジェクトに参加する私企業は、貸借金、生産資材およびその他のサービスのわずかに五〇％を供給することになった。残りの五〇％は政府が負担することになった。

その借金の返済は物納または現金で行うこととなった。

7. デマス、ビマスあるいはビマス、ゴトン、ロヨンの何れの場合もそのプロジェクトに対する誘導、指導、普及教育および管理の形の政府のサーヴィスは政府の開発予算すなわち開発省の予算から支払われた。

#### 五 用 語

1. マス Bimas (Mass Guidance) 訓練を受けた一組の指導者により、必要な生産資材を供給しながら指導が行なわれる普及教育の組織である。貸付は現金で生産資材を購入することのできない農家にたいしておこなわれる。

*P. Sila*  
生産の増加は五つの仕事 Pantja Karya (五つの努力—Pantja Usaha、生産の統制、加工、流通および共同組織の発展)を通じて、農家の福祉の向上を目的としてゐる。

2. 新しい Bimas Baru (New Bimas) このマスは PB-5, PB-8 (IR-5, IR-8) その他の改良品種を用いて行なうもので、これらの品種は施肥により増産が期待される。

3. 改善されたマス Bimas Jang Disempurnakan (Perfected Bimas) 指導、普及教育、生産費の供給および配給、および生産資材の供給および配給が改善されたマス組織である。

4. マス、トン、ロムン Bimas Gotong Rojong (Cooperative Bimas) このプロジェクトでは、政府と他の私企業が共同で担当する組織である。生産費の供給と配給、生産資材の供給と配給およびその他のサーヴィスは政府と私企業が共同で行う。

5. 改善されたマス、マス、ゴトン、ロヨン、のなかで、新マスが PB-5, PB-8 の新品種を用いて行なわれる。

6. インマス Inmas (Mass Intensification) そこにゐる技術



者が普通の指導だけを行い、生産資金の貸付を行なわないビマスの組織である。この場合、生産資材だけでは充分現金で買うことができるようになっていた

ジャカルタで。 一九六九年一月三日

農 林 大 臣

(西村昌造 訳)





ビマスーその基礎、当面問題および将来

農務省、ビマス統制本部

ジャカルタにおいて。一九六九年

## 一 序 言

1. 一九七〇年のインドネシアの人口は、一二一・一百万人と推算されている。

2. インドネシアの農耕地は、一四・五百万haに達するが、その内訳は次のとおりである。

個人農業 一二・九百万ha

農園 一・六

合計 一四・五

3. 個人農業の一二・九百万haの内訳は次のとおりである。

水田 四・一百万ha

畑 八・八

4. 農家の構成は次のとおりである。

水田 八・〇百万戸

畑 八・八

総計でインドネシアの農家戸数は一二・二百万戸である。(一部

の農家は水田と畑とをもっているので、訳者註)

5. インドネシアの米の生産は約七・七百万haの面積で一・一〇百万トンの米が収穫されることになっている。その内訳は水田六・三百万ha、畑一・四百万haとなつている。

6. 米の生産に従事している農家が約一〇百万戸いるが、その中

八・〇百万戸は水田栽培を行なつている。

7. 五カ年計画 (Repelita) では一九七三年には、インドネシア

の米の生産を一五・四百万トンに達せしめることになつてゐる。  
このばあいの農家戸数は約八一〇百万戸が考えられている。

## 二、ビマスーその推進と基礎

8. インドネシアで米の生産に従事する農家数を約八一〇百万戸として、比較的短期間である五カ年計画で、約一一・〇百万トンから一五・四百万トンに増産を行うのには、年増加率を約二〇%にしなければならない。ビマス、プロジェクトはグループ接近（グループ、プログラム）および農家の必要とするものを組合せて供給するサーヴィス接近を行う普及教育の農業接近の一つの方法として展開されてきた。

9. 国のビマス、プロジェクトの実施が地方に伝えられると、このプロジェクトに参加する農家の数がその面積から推算されている。それによると、インドネシアの水田の一戸あたりの耕作面積が一戸あたり〇・五haとすると、一・〇百万haのビマス推進面積があれば二・〇百万戸の農家が参加したこととなる。このことはビマス、プログラムを実施するとき第一に当面する問題である。したがつて、農業発展プログラムは農業普及教育に改造されなくてはならない。

10. さらに、農業普及教育活動は教育活動とならなくてはならないことが強調されるべきである。この教育活動の手順は、住民を自覚させて、物質的（経済的）および精神的（文化的）変化を洞察するようにさせ、住民の福祉の向上を計ることである。

このことが、農業普及教育の仕事にたずさわる人々、すなわち普及教育的プログラムとしてビマスを実施する人々の使命である。

11. すべての普及教育的方法および手段が、われわれの努力を成功



させるために用いられるべきである。

○ コースを与えること。

○ 展示圖をつくり、農業経営の展示を行う。

○ 農家の集会を行う。

○ 研修旅行を行う。

○ 共進会を行う。

○ 映画またはスライドを見せる。

これらの方法のなかには資金を多く要するものもあり、また金のかゝらないものもあるが、実際に普及教育を進めるためにはその村で用いることができる施設を基礎として行うべきである。必要ではあるうが、あまり多くの施設を期待すべきではない。現在、多く用いられている方法は、農場巡回、農家の集会、および展示などである。

普及教育の方法は、その地方の発展過程および可能性に応じて修正されなくてはならない。

12. 普通、展示は農家の集会または農場巡回と結びつけて行なわれる。集会フォーラム、または農場巡回フォーラムを行う農家のグループは、普通そのことに容易に関心をもつことができる約三〇名位の人数で構成される。この人数は普及教育活動を行うばあい、重要な基礎となるものである。この三〇人の農民は一戸のモデル農家（鏡になる農家）によつて普通に指導できる人数である。このようなモデル農家はインドネシア中で数千人も見出すことができる。このような農家は創造性をもち、村の共同組織の発展に熱意をもつていて、その村の農業の問題を分析するような知力をもつたすぐれた人でなくてはならない。したがつて、モデル農家は

すぐれた技術をもつ人である。上記の農家のグループがそのモデル農家に接すると、そのモデル農家にその仲間を誠実に指導する。われわれはモデル農家の農業技術、技能および智識の能力を改善することができ、また必要があれば、その農家に農業の普及教育の基礎的な方法ですらも教育して改善することができる。

普及教育活動の第一歩はできるだけ多数のモデル農家を発見することである。このようなモデル農家は、その能力を刺激するコースを実行して、農家のグループに集会をもつ動機付けをするのに役立つ。

このような集会は、増産についても各段界でとりあげる展示により変化がある。また、その後加工、市場出荷および流通のいろいろの問題がでてくる。

このような自覚の過程は、農家の自覚をうながし、農業の近代化にたいする態度を変える動機付けを刺激する教育の過程である。

13. このような農業上のグループの集会は、ビマスの形で共同的努力を計画するための適当なフォーラムである。また、このことによりグループ、プログラムとしてのビマス、プログラムの重要な基礎にもなる。

14. 能率的に考えると、このグループは約五〇haの範囲でグループ、プログラムを作るのが必要であるかも知れない。上記のデータを用いると、五〇haで一〇〇戸の農家となるので、それを三―四のグループにわけて、一グループが二五―三三戸となるようにして集会を開く。つまり、五〇haについて、三―四名のモデル農家を訓練して、その仲間を指導するようにする。このような農家を選ぶのは仲々容易なことではなく、もしその選択を誤まると農家の



グループは成功しない。

15. インドネシアの普及教育局の職員の数が制限されている事を考えると、(各 Kertajajarai に最高一―二名) インドネシアのすべての普及教育活動でこのピマス、プログラムを成功させるためには、それを充分に実施できるだけの数のモデル農家を見つけて、これを訓練しなくてはならない。一九七三年に四百万 ha の水田がピマスに参加するとすると、それに動員する農家のグループは約六―八百万戸の農家で組織することとなる。三〇―三二戸でグループを構成すると二〇〇、〇〇〇―二六〇、〇〇〇のグループができて、一九七三年までに二〇〇、〇〇〇―二六〇、〇〇〇戸のモデル農家が訓練されなくてはならない。このことは五カ年計画の目標数字からでた見とおしである。

16. このような指導の過程は一貫性をもち、明瞭で、共同で実施されなくてはならない。というのは農業関係の機関は複雑で、それぞれの機関および組織が指導を行なっているからである。これらが共同して働らき、農家への接近および系統が単純化されると、農民はそれを受け入れやすくなる。

農家のグループのフォーラムが積極的集会になるためには、確信のある展示を行うともりあがりが出てくる。このようなことはピマスのようなグループ、プログラムを実行するばあいにもつとも良いことである。集会の指導を積極的に行うためには、教育的活動を伴わなくてはならない。その教育的活動は参加者に共同の効果の正しさを権力のないことについての信念を強めることとなる。このことには五つの原理 Pantja Sila (the Five Principles) にもとづく民主的社会を建設する効果的基礎とな

る。

17. グループ、プログラムとしてのビマス、プロジェクトは、また五つの努力 Pantja Usaha (the Five Agricultural Efforts) を実行する組合せプログラムとして用いることができる。五つの努力の体制のなかで、その組合せを柔軟に地方の特徴を生かして運営することは県のビマス、指導本部 (Provincial Bimas Guidance Body) または県ビマス実行本部 (Kabupaten Bimas Executive Body) で行なわれる。そこでは政府の一般的な政策の体制のなかで、それぞれの部および村の政策が特徴付けられる。

18. そこでのプロジェクトを改善する普通の計画および努力は、専門家のチームと組織的統制により行なわれ、その評価も定期的に行なわれる。その専門家のチームは技術的と社会的との両面を知らなくてはならないので、公的団体からか、あるいは農家の大衆組織から選ばれたもので構成しなければならない。

### 三、当面する問題

19. 農業も当然経済活動の一部であるので、経済的法則がこれを成功させるおもな基礎となる。農業の普及教育の一つの体系としてのビマスもまたその推進については、これらの経済的法則に注意しなければならない。

経済的活動として重要な現象は次の点である。

- 生産資材、農家の生活費、および農産物の価格に関する問題点。
- 経済的下部構造―道路、運搬、施設および水路。
- 生産資材の恒常的な供給、およびそれらが容易に入手できること。
- 発展する農産物の流通



- 農業についての科学および技術の発展の準備をすること
- 農家の生産意欲を向上すること。

政府の政策はこのような現象を指導し、そのことによつて農業の活動を発展させることができる。農業の教育プログラムとしてのビマスはまた、上記のいろいろの現象により影響をうける。

20. 上記の現象のほかにも、農業の発展をスムーズにする重要な要素がある。

- 効果的な農業融資制度

- 協同組合またはグループの活動

- その他

21. 上記の19および20であげた現象は徐々には改善されるであろうが、一時に全般的に改善することが不可能ならば、ビマス実施地区を優先的にとりあげて行いべきである。

国内および外国の企業からの援助が必要ないは、ビマス、ゴトン、ロヨンを実施することができる。政府自身で実施することができるのであれば、国のビマスを行う。農家自身が政府の支持なしに実施できるならばインマス Immas(Mass Intensifi

cation)で実施することとなる。

22. いかなる方法を用いても、一九七三年には、四百万haの面積で増産を行い、約一五・四百万トンの米を収穫しなければならぬ。しかもその用いる方法は政府と農民の能力の向上の上に築かれなくてはならぬ。

#### 四 ビマスの将来

23. 上記のような問題を考えると、このビマス、プロジェクトを住民の教育プログラムとして、農業の普及教育の方向として、住民

の福祉の向上の手段として、そしてまたインドネシアの米の増産の推進方策として同時に発展させなくてはならない。

24. 今後もさらに正確な計画とプログラムを改善するための継続的な発展が、系統的にまた共同的に実行されることが必要である。改善には誤りがあつてはならないし、またはつきりした評価が必要である。

多くの職員がこのプロジェクトを成功させるために、誠実にかつ正直にその最善を尽している。しかし、われわれはまたその人の仕事を矯正しなければならない職員のいることも認めなくてはならない。系統的な、よく計画された統制と評価を行なつて、この部分の問題を解決しなくてはならない。

我々は大衆広報の手段としての新聞の支持と理解を期待する。新聞はゴールを目指しているビマスが当面している問題について、大衆教育の重要な手段である。それによつて実施にあたつての非難ややりすぎをよく知ることができ、徐々にそれを少なくするとともに最後にはやりすぎの起きないようにしてこの大衆教育系統を系統的に誘導することができるようになるだろう。

25. ビマス統制本部は新聞の積極的および建設的な示唆をとりあげて、このプロジェクトの計画および改善に考慮を加えるべきである。

26. これを推進することは、我国の五カ年計画目標達成にたいしてのわれわれの努力の積極的要素となるので、このビマス、プロジェクトを協力して発展させよう。

ジャカルタで。一九六九年二月二七日

農務省 ビマス統制本部 (西村昌造 訳)



# ビマスおよびその統制

農務省 ビマス統制本部

ジャカルタ。一九七〇

(これはビマス本部長官がバンドンで一九七〇年二月十三日インドネシアの学生の研究グループに行なつた講演である。)

1. ビマスはその発展の歴史をかえりみると、一九六三／六四年の雨季からはじまつたもので、はじめは五つの完全な努力 Pantja Usaha Lengkap (the Five Complete Agriculture Efforts) 一〇五 ha の面積からはじまり、集団展示 Demas (Mass Demonstration) と呼ばれた。

2. このプロジェクトは、今日ではビマス Bimas (Mass Guidance) と改称して、一九六九／七〇年雨季には一、四一八、五〇〇 ha の面積で実施された。

3. その作季毎の発展の過程を追つて見ると、次表のとおりである。

一九六三／六四年	雨季	一〇五 ha
一九六四／六五年	雨季	一一、〇〇〇 ha
一九六五／六六年	雨季	一七二、四八八 ha
一九六六年	乾季	一六八、一二九 ha
一九六六／六七年	雨季	四六三、二三〇 ha
一九六七年	乾季	一一、二四〇 ha
一九六七／六八年	雨季	四八九、三一九 ha
一九六八年	乾季	二七三、八五一 ha
一九六八／六九年	雨季	七三二、三八七 ha
一九六九年	乾季	五四七、七七五 ha
一九六九／七〇年	雨季	一、四一八、五〇〇 ha

4. 一九六七／六八年の雨季からインマス Inmas (Mass Intensification 集団増産) がはじめられ、ビマス、プロジェクトのあとをひきうけて行なわれることとなつた。このプロジェクトでは、農家の意識が一段と高くなつてゐるので、自主自立で農業増産運動を実行して、必要な生産資材を現金で買い、既存の各機関(銀行、普及教育等)の援助の下で、すべてのことを自分で管理するものである。

5. インマスは毎年発展して、その様子は次のとおりである。

一九六七／六八年	雨季	六二五、六五三 ha
一九六八年	乾季	一三九、九八一 ha
一九六八／六九年	雨季	五九六、九一〇 ha
一九六九年	乾季	八一、一二三 ha
一九六九／七〇年	雨季	八〇六、五二〇 ha

(計 画)

6. 一九六八／六九年には特別な形のビマスすなわちビマス、ゴトン、ロヨン Bimas Gotong Rojong (the Cooperative Bimas) がはじまつた。このビマス、ゴトン、ロヨンというのは、政府以外の国内および外国の商社がビマス、プロジェクトに必要な生産資材の供給その他のサーヴィスを担当するものである。

7. このビマス、ゴトン、ロヨンは次のような発展を遂げてきた。

一九六八／六九年	雨季	二九八、一一二 ha
一九六九年	乾季	四六八、八三七 ha
一九六九／七〇年	雨季	一、〇八五、〇〇〇 ha

(計 画)

8. 一九六三／六四年より一九六九／七〇年までの間に、ビマス、



ビマス、およびインマス運動は延六・五百万haで展開された。

何がビマス運動の原理か？

9. ビマスは普及教育の一つのプログラムであつて、その活動は教育の分野では不正規の教育である。

10. ビマスはグループ、プログラムで、同時に組合せのプログラムである。はじめの頃は、五つの努力 Pantjan Usaha (the Five Agricultural Efforts) が組合わされてあらわされていたが、その後発展して五つの仕事の原理 Pantja Kaya (the Five Working Principles) に発展した。

五つの努力というのは次のような項目である。

- a 改善された水の管理
- b 優良品種の採用
- c 施肥
- d 植物保護（病虫害にたいして）
- e 栽培法の改善

五つの仕事には次のような活動が含まれている。

- a 前記の五つの努力の実行
- b 生産物の統制
- c 生産物の加工
- d 生産物の流通
- e 村の共同組織の発展

11. ビマスは普及教育の一つのプログラムとして、農家自らの自由意志にもとづいて自分の農業の生産性をより高め、農家自らの福祉の向上を行うものである。

12. ビマスあるいはインマスは五ヶ年計画における食糧計画を実行

する一つの方法であるので、米の増産は一九七三／七四年には、この運動が四・〇百万haで展開され、米の生産量が一五・四百万トンになることが期待されている。

#### 実施に当つての二三の問題点

13. 農家を独立した農業企業者として育て、その生産性を自然、資金および労働により高めるのがビマスであるが、今日でも尚普及教育の原理と完全には一致するところまで行っていない。この普及教育は不正規の教育である。

最終的にはビマスは五つの基礎 *Pantja Sila* (the Five Living Principles) にもとづいて共同組織の発展の原理と密接な関係が出てくる。

14. 一般的な開発計画と同様に、農業開発でも特に施設、仕事の仕方および実施者の精神力の点について、作戦的管理が組織的に展開されることが必要である。またこのことは我国の社会的経済的安定とも関連をもつものである。

15. 村単位またはその上部のいろいろの活動が、村の段階で国のプログラムの実現に時間的に一致するように調整するためには、慎重に相談して、国の発展計画を支持するように向けて行かなくてはならない。(これがビマス、プログラムである。)

16. 一般的な体制または計画の中で、いろいろの活動をその地域の特別な性格の統合された形で行なわなくてはならない。

17. 計画の中でK.I.Sすなわち調整 (Coordination) / 統合 (Integration) および同時性 (Synchronization) が実行できるよう統制すべきである。このK.I.Sは垂直的にも、水平的にも考えられるべきであろう。



## ビマスの統制

18. ビマスの組織および仕事の手順は、一九六九年十一月二十二日付の大統領の命令第一九六九一九五により決定されている。

19. ビマスの作戦上の統制を行うために、次のような組織がつけられている。

- a、国の段階    ビマス統制本部 (Bimas Control Body)
  - b、県の段階    ビマス指導本部 (Bimas Guidance Body)
  - c、部の段階    ビマス実施本部 (Bimas Executive Body)
20. ビマス統制本部は次のような構成である。

- a、ビマス統制委員会 (the Bimas Control Committee)  
ビマスの作戦上の実行について一般的政策を快走する。
- b、常任ビマス統制委員会 (the Daily Bimas Control Committee)    ビマス統制委員会で決定したことを実行に移す。  
ビマス指導本部は次のような構成である。
- a、ビマス指導本部はビマス、プロジェクトの作戦的実行について、全般的体制の下に部単位の方策を決定する。
- b、常任ビマス指導本部はビマス指導本部の決定にもとずいて実行を行う。

ビマス実行本部は次のような構成による。

- a、ビマス実行本部はビマスの部単位の実行について、全般的および部単位の体制の下に、その地方の方策を決定する。
- b、常任ビマス実行本部はビマス実行本部の決定にもとずいて実行を行う。

21. ビマスの統制について特に注意すべき事項

- a、計画一村、Ketjamtan, Kabupaten、県、国

b、ビマス、プロジェクトの中の普及教育

#### 展示ー組織

農家のグループ圃場試験および普及教育にもとづく情報

c、管理および報告

参加者、貸付金、生産資材および貸付金の返済について村の

#### 管理

刈取りおよび報告事項についての管理

d、広報活動

ビマス活動ーその当面する問題ー大衆の意見を求めることー  
国の計画を実現するために、このプロジェクトに参加している  
という自覚

e、このプロジェクトの発展と改善のための手順

#### 結 論

22. 部落の一人一人が国および国民の安全ならびにこの発展を促す  
ことに責任をもたなくてはならない。

23. インドネシアの米の問題を解決するために、国のプログラムと  
して展開されてビマス運動に、この公開討論会で全インドネシア  
の学生部隊に、このビマス活動に積極的に参加することを要望す  
る。活動の形式は既存の国の体制及び地方毎に特徴のある組織の  
中で、もつともよく調整をとり、国でとった一般的な政策に従  
うことになる。

ジャカルタ 一九七〇年二月十三日

農務省、ビマス統制本部。



開発5カ年計画の作戦的統制(1969/1973)についてのインドネシア大統領の決定(1969-18)

部	門	部 門 の 議 長
A. 農業 Agriculture		農務大臣 The Minister of Agriculture
B. 工業 Industry		工業大臣 The Minister of Industrial Affairs
<b>M</b> C. 鉱業 Mining		鉱業大臣 The Minister of Mining
D. 生産の下部構造 Production Infrastrusture		公共事業および電力大臣 The Minister of Public Works and Electric Power
F. 予算 Budgeting	<i>foreign</i>	金融大臣 The Minister of Finance
G. 外国貿易 Foreign Trade		商務大臣 The Minister of Trade
H. 主な生活必需品 Main Neccesaries of Life		商務大臣 The Minister of Trade
I. 西イリアン West Irian		内務大臣 The Minister of Internal Affairs
J. 全般的選挙 General Election		内務大臣 The Minister of Internal Affairs
K. 農林開発 Village Development		内務大臣 The Minister of Internal Affairs
L. 観光事業 Tourism		交通大臣 The Minister of Communication
M. 労働関係 Padat Karya		労働大臣 The Minister of Labour
N. 研究および普通教育 Research Extension		国家計画委員会議長 The Chairman of the Ivnational Planning Board/ BAPPENAS
O. 住宅問題 Housing		公共事業および電力大臣 The Minister of Public Works and Electric Power

部 門	部 門 の 議 長
P. 情報 Government Apparatus	情報大臣 The Minister of Orderly Public
Q. 委員と秩序 Security q Order	APPAratus (MENPAN)
	PANGKOPKAMTJB



A 部門 農業

I プログラム A 1. 食糧

A 2. 漁業

A 3. 家畜

A 4. 農園

A 5. 林業

II 部門の議長 農務大臣

III 部門の構成

1. 金融省

2. 中央銀行

3. 公共事業 電力省

4. 内務省

5. 商務省

6. 工業省

7. 貿易省

8. 労働省

9. 移住および協同組合省

10. 運輸省

11. 法務省 (Dept of Justice)

12. 防衛および安全省 (Dept of Defence V Security)

13. 情報省 (Dept of Information)

14. 国立法組織 (National Logistic Body/BULOG)

15. 国立科学研究所 (The Institution of National Science

KOSURTANAI

17. 中央統計局 (The Central Bureau of Statistics)

18. 投資の技術委員会 (The Technical Committee on Capital Investment)

19. 国家計画委員会 (The National Planning Board) (BAPPENAS)

IV 主な義務

広い意味の農業の生産を増大し、食料の自給を計り、同時に栄養改善を行い、貿易収支を改善するために輸出農産物の増加と拡大を行う。これらの輸出は住民の生活水準の向上の努力の見透し範囲で考える。

B 部門 工業 (略)

(訳註、これ等の計画はQ部門までである。)

(西村昌造訳)



## 事務局だより

### 五月主要行事

#### 一、インドネシアならびにタイ国現地農業事情調査実施

財団の本務である農業技術者の海外派遣あつせんを開始するに当りそれらの派遣先の実情を調査把握しておく必要があるの  
で最も民間ベースが展開しているインドネシア国を選んで左記  
要領による調査を実施した。

丁度インドネシア政府よりビマスゴトンロヨンの中止が発表さ  
れビマス計画交代要員の現場視察は必要がなくなつたが派遣体  
制に因する種々の問題を把握して今後の事業運営に大いに資す  
る所があつた。なおこの調査報告は本号ならびに次号において  
詳述する。

#### 海外農業現地事情調査計画

##### 1. 調査事項

海外農業開発協力事業に派遣されている技術者の現場および派  
遣体制に関する問題点と農業事情につき調査する。

##### 2. 調査期日

昭和四十五年五月二十三日―六月十三日

##### 3. 調査要員

海外農業開発財団 事務局長 石 黒 光 三

専門技術者 中 田 正 一

##### 4. 調査地域および場所

(1) インドネシア国

海外技術協力事業団実施現場

西部ジャワ食糧増産計画

(ボゴール)

東部ジャワトウモロコシ開発計画

(スラバヤマラン)

三菱商事ビマス計画実施現場

(バンドン)

三井グループビマス計画実施現場

(マデウシ)

住友商事農業改良普及事業実施現場

(クラワン)

日綿実業ビマス計画実施現場

(セマラン)

日本工営出張所およびカランカテス

(ジャカルタ)

ダム工事現場

(カランカテス)

以上 ジャワ島

三井物産ミツゴロウ事業実施現場

(ランボン)

丸紅飯田契約栽培実施現場

(メダン)

以上 スマトラ島

(2) タイ国

国立コーンソルガム研究センター

(バクチョン)

5. 調査日程

月 日 時間 場所 行事及摘要

五月三(土) 九〇〇 東京発 J・L 七一便

一九四〇 ジャカルタ着

二(四) クワラン地区 住友現場調査(自動車)

二(五) ジャカルタ市内 大使館 OTCA 日本工営

各商社 ジエトロ 東銀等

関係方面訪問(自動車)

(以下全行程自動車による)

二(火) ボゴール地区 OTCA 現場



二七(水)

バンドン地区

三菱現場

二八(木)

バンドン発

セマラン着

セマラン泊

二九(金)

セマラン地区

日綿現場調査

三〇(土)

セマラン発

クラワン西ドイツビマス調査

マデウン着

マデウン泊

三一(日)

マデウン地区

三井グループ現場調査

マデウン着

マデウン泊

六月 二(月)

マデウン発

カラシカテスダム現場調査

マラン着

一(火)

スラバヤ地区

OTCA現場調査(自動車)

二、三〇

スラバヤ発

夜行バス

三(水)

一〇〇〇

デンバサール着

デンバサール泊

四(木)

〇六一〇

デンバサール発

G・A 八七九便

〇七三〇

ジャカルタ着

ジャカルタ泊

五(金)

〇七五〇

ジャカルタ発

G・A 一四八便

〇八四〇

テルクベテウク着 (自動車)

六(土)

ランボン地区

ミツゴロウ現場調査

現場泊(自動車)

七(日)

〇九一〇

テルクベテウク発 G・A 一四九便

一〇〇〇

ジャカルタ着

ジャカルタ泊

八(月)

一〇一〇

ジャカルタ発

G・A 八〇便

一二〇〇

メダン着

領事館 丸紅事務所訪問

九(火)

メダン地区

丸紅現場調査(自動車)

メダン泊

一〇(水) 一三、〇〇 メダン発 G・A 九八八便

一四、四五 シンガポール着 シンガポール泊

一二(木) 〇九、四五 シンガポール発 J・L 七二二便

一一、二五 バンコック着 大使館 O T C A 等

関係方面訪問

一二(金) バクチョン 国立コーンソルガム研究所視察

バンコック泊

(自動車)

一三(土) 一三、一〇 バンコック発 J・L 七二二便

二一、二五 東京着

## 二、アジア太平洋地域食糧会議に大戸専務出席

五月十一日より五日間ホノルルのハワイ大学内にあるイースト  
アンドウエストセンター(米国政府機関)が主催するアジア太平  
洋地域の食糧増産に関する基本方針につき討議された。本財団よ  
り大戸専務が参加し、財団事業についても参加各国の代表に説明  
する機会を持つた。また、同センターと本財団との事業交流等に  
ついても打合せをした会議の主な参加者は左記の通りである。

中華民国経済省次官・フィリッピン大学学長・フィリッピン国  
際稲研究所所長・インドネシア農林省農業総局長・タイ国カセツ  
サート農科大学学長等四十数名。



### 三、第一回人材委員会開催

四十五年度の事業計画に従い、本財団に人材委員会を設けて人材確保の方向づけと要員の選定をすることとし、左記四名の方々に理事長より委員を委嘱した。

原 政 司 農林漁業金融公庫理事

吉 原 平二郎 海外技術協力事業団常務理事

久保田 豊 日本工営社長

戸 刈 義 次 東大名誉教授

五月二十日、経団連会館において第一回人材委員会を開催、委員会の運営と要員の募集、登録、プールの方法、要員確保基準規定等について審議した。

なお、登録およびプールする技術者の人選については、第二回の委員会でを行うこととする。

### 四、インドネシア農業省サディキン農業総局長との懇談会開催

大戸専務と共に、ハワイの東西センターにおける会議に出席されたサディキン氏が、帰路本財団を訪問されたので、五月二十日経団連会館において同国の農業施策を中心とした懇談会を開催した。インドネシアにおいて事業実施中の各社を中心として多数の方々が集まれ、ビマス計画等について懇談した。





海外農業に対する協力事業ならびに

開発事業に従事したい方

海外農業に対する協力事業ならびに

開発事業に必要な人材を求めている方

は本財団へご連絡ください。

海外農業開発財団は

○海外農業技術者を希望する方の登録とプール

○新人からの海外技術者の養成、

○待機中の技術のブラッシュ・アップに必要な研修費の貸付、

○海外農業情報のしゅう集、紹介

○海外農業の企画調査などを事業として行い、

海外農業の協力および開発事業をしている団体企業等に優秀な農業技術者をごあつせんいたします。

財団法人 海外農業開発財団

〒107 東京都港区赤坂8-1-10  
アシア会館内 32

東京 〇三(四〇一一)六一一  
内線30

直通 東京 〇三(四〇一一)一五八八

